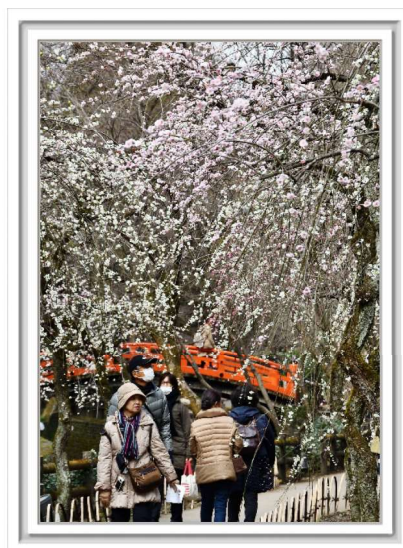


「梅と日本人」 小高 功

今年は数十年ぶりの寒波で各地に予想もしない多くの雪が降り、寒い日が続いております。それでも2月になりますと、梅は百花の魁として真っ先に小さな花をつけます。

古の万葉の歌人は、梅の開花に厳しい冬の終わりと春の訪れを感じ、多くの和歌を詠いました。その数は119首(桜の3倍)にもなるとのこと、心に浮かぶ「梅に鶯」のイメージと共に、私たちにとってまさに日本的な景色です。



@京都・北野天満宮(2017.03.08)



社紋
(星梅鉢)

各地の点在する梅林と梅公園、そして数々の神社(特に九州の太宰府天満宮、京都の北満宮、東京・湯島天神などが有名)が梅の名所になっております。

たくさんの方が神社に参拝の上、枝垂れ梅の咲き誇る下を逍遥し、神社の社軒先の灯籠の姿にしみじみと厳かな風情を感じます。そして若いカップルがおみくじ(御神籤:吉凶の神のお告げ)を梅の枝に結びつけ、願いの成就を祈ります。しかしながら、古代日本には梅は存在しなかったようです。

一説では、梅は中国から輸入された花木で、遣唐使が薬として梅干しを持って帰る際にその種と木を持ち帰り、宮廷で育てていたもののようです。それまで梅をさす日本のことばはなく、「うめ」の呼称も中国語の読みが変化したもののようです。長きにわたって貴族に大事にされ、日本的文化の代表にまでなりました。梅に関し、台湾ではどのようなお話があるのでしょうか。

なお、梅林で見る鳥は、花蜜を好むメジロが多く、警戒心が強く虫・木の実をより好む鶯は鳴き声のみ聞こえてくるばかりのようです。